

論文

ボランティア活動への参加をもたらすもの

猿渡 壮[†]

要約：本稿は、ボランティア活動への参加に関して社会的な観点から検討を行うことを目的としている。議論はまず、ボランティア活動とは何かという概念的な問題からスタートする。ここでは、ボランティア活動が自発性、無償性、公共性などの性質をもつことを押さえたうえで、自発性と公共性の2つを軸に、ボランティア活動が利他的活動や公共的活動一般といかなる関係にあるかが整理される。

次に、ボランティア活動に関する経験的検討へと向かう。そこで検討されるのは、何が人々をボランティア活動へと導くのかという問題である。ボランティア活動への参加に影響する変数として本稿が特に注目するのは、人々が現在もつ社会的連帯や、過去に築かれた社会的連帯である。分析では、こうした連帯に関わる要因がボランティア活動への参加に影響を与えることが示されるとともに、連帯が参加を生み出すメカニズムについて、社会集団への愛着や社会化に着目した検討がなされる。

キーワード：ボランティア活動、社会的連帯、社会集団への愛着、社会化

目次

1. ボランティア活動とは何か
 - 1-1. 自発性・無償性・公共性
 - 1-2. 利他的活動・公共的活動・ボランティア活動
2. ボランティア活動の基盤としての社会的連帯
 - 2-1. ボランティア活動への参加と社会的属性
 - 2-2. ボランティア活動への参加と社会的連帯
 - 2-3. ボランティア活動への参加と過去の社会的連帯
3. 社会的連帯を通じた社会化と公共的活動への自発的参加
 - 3-1. 公共的活動への自発的参加を生み出す精神的基盤
 - 3-2. 社会的連帯・社会集団への愛着・公共的活動への参加
 - 3-3. 過去の社会的連帯・社会集団への愛着・公共的活動への参加
 - 3-4. 参加と社会化の循環構造
4. おわりに

[†]同志社大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程

*2015年6月30日受付, 2015年7月6日掲載決定

1. ボランティア活動とは何か

1-1. 自発性・無償性・公共性

ボランティア活動は一般に、自発性、無償性、公共性などの特徴から理解される（入江 1999；早瀬 2004；中野 2012）。自発性は、活動への参加が法的に義務付けられていたり、他者から強制されたりするのではなく、人々の自発的な意志に基づくことを意味する。また無償性は、活動が無報酬でなされたり、仮に最小限の報酬が発生する場合であっても、活動の目的自体が報酬の獲得にはないことなどを意味している。これらに加え、ボランティア活動は公共的な活動でもある。ただ、この公共的活動の意味するところは必ずしも自明ではない。ボランティア活動について議論するに当たって、まずはこの公共的活動というものについて簡単に整理しておくことにしよう。

当然のことながら、自己の利益のためだけになされる活動は公共的活動ではない。ならば公共的活動とは他者のためになされる活動かという点、そうともいえない。電車でお年寄りに席を譲ったり、金銭的な問題を抱える友人に金を貸すといった行為は、他者のためになされるものではあっても公共的な活動とはいいづらい。それに対して、高齢者が住みやすい街づくりや貧困国への支援活動といったものは、多くの場合公共的な活動とみなされる。それは、これらの活動が特定の個人ではなく、「高齢者」や「貧困国」といった集団や社会をよりよいものとするための活動だからである。公共的活動とは、自己や特定の個人のためではなく、人々の集団や社会をよりよいものとするための活動である（小林 2012）。ボランティア活動は、こうした意味での公共的活動に含まれる 1 つの活動なのである。

1-2. 利他的活動・公共的活動・ボランティア活動

ボランティア活動のもつ自発性、無償性、公共性といった性質うち、どの要素をより本質的なものと捉えるかは論者により異なる。また、既存の社会制度で対応されていない問題に取り組むことなどを意味する先駆性や、活動の継続性といった性質も含めてボランティア活動が捉えられる場合もある。ここでの筆者の立場は、自発性と公共性の 2 つを中心にボランティア活動を考えようというものである。ここでこうした立場をとるのは、利他的活動や公共的活動一般とボランティア活動との関係を整理する上で、この 2 つの性質がより重要だと思われるからである⁽¹⁾。

いま、自己の利益のためではなく、他者や集団や社会をよりよいものとするためになされる活動全般を、利他的活動と呼ぶことにしよう。図 1 は、この利他的活動の中に公共的活動とボランティア活動を位置づけたものである。図の縦軸は、特定の他者（個

人)の状態を改善するための活動か集団や社会の状態を改善するための活動かという「活動目標の違い」を表している。また図の横軸は、活動が義務として行われるか自発的に行われるかという「活動動機の違い」を表している。図の第Ⅳ象限は特定の他者の状態を改善するための自発的な活動、第Ⅲ象限は特定の他者の状態を改善するための義務的な活動、第Ⅱ象限は集団や社会の状態を改善するための義務的な活動、第Ⅰ象限は集団や社会の状態を改善するための自発的な活動である。先述したように、公共的活動は集団や社会をよりよいものとするための活動であるため、第Ⅰ象限と第Ⅱ象限に位置づけられる。このうち、自発的な動機からなされる活動、すなわち第Ⅰ象限に含まれる活動がボランティア活動である。

ボランティア活動については、市民運動や住民運動などの社会運動と共通の性質をもつといわれることがある。その理由を本稿の図式から整理すると、次のようになる。基本的に、市民運動や住民運動といった活動は、自己や特定の個人の利益のためだけでなく、集団や社会をよりよいものとするためになされる。片桐新自は、社会運動が「公的な状況の一部ないしは全体を変革しようとする」活動であることを述べるが(片桐1995: 73)、これは上記の性質を表したものともいえるだろう。加えて、市民運動や住民運動などの活動は、義務的なものというより、人々の自発的な意志に基づくものである。つまり、ボランティア活動と同様、市民運動や住民運動といった活動も基本的には図の第Ⅰ象限に位置づけられる活動ということになるのである。自発性に基づく公共的活動にはさまざまなものがある。ボランティア活動は、そうした活動全体に含まれる1つの活動なのである。

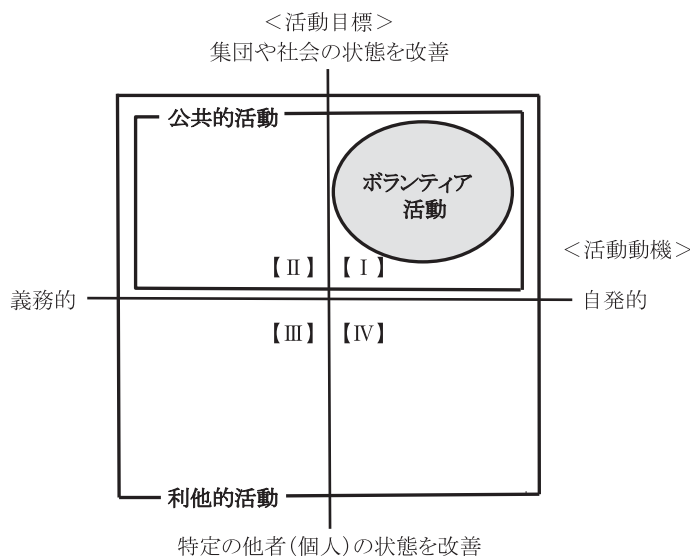


図1 利他的活動・公共的活動・ボランティア活動

2. ボランティア活動の基盤としての社会的連帯

2-1. ボランティア活動への参加と社会的属性

では、どのような人々が実際にボランティア活動に参加しているのだろうか。2005年のSSM調査データをもとに見ていこう。

この調査では、ボランティア活動への参加に関して2つのことがたずねられている。1つはボランティア活動をふだんの程度行っているかをたずねたものであり、「いつもしている」「よくしている」「ときどきしている」「めったにしない」「したことがない」の5つの選択肢から回答が求められている。この問いへの回答が「いつもしている」に近いほど得点が高くなるよう5～1点を与え、この得点をボランティア活動への参加スコアとしよう。もう1つは、過去5・6年におけるボランティア活動経験の有無をたずねた項目であり、「したことがある」「したことがない」の2つの選択肢から回答が求められている。表1はボランティア活動に関するこれら2つの変数と社会的属性との関係を見たものである⁽²⁾。

表から、性別とボランティア活動参加の間にはあまり一貫した関連がないことがわか

表1 社会的属性とボランティア活動への参加

		参加スコア			近年のボランティア活動経験				
		平均	N	有意確率	あり	なし	合計	N	有意確率
性別	男性	1.925	1326	0.026	30.7%	69.3%	100.0%	1283	0.331
	女性	2.015	1469		29.0%	71.0%	100.0%	1533	
年齢	20代	1.804	322	0.000	24.4%	75.6%	100.0%	303	0.000
	30代	1.741	510		20.1%	79.9%	100.0%	522	
	40代	2.059	559		32.6%	67.4%	100.0%	531	
	50代	2.018	678		30.9%	69.1%	100.0%	715	
	60歳以上	2.099	726		35.7%	64.3%	100.0%	745	
職業	専門	2.204	304	0.000	37.0%	63.0%	100.0%	308	0.000
	管理	2.133	150		42.9%	57.1%	100.0%	133	
	ホワイト	1.943	669		27.8%	72.2%	100.0%	716	
	ブルー	1.822	764		26.6%	73.4%	100.0%	768	
	農業	2.202	114		33.3%	66.7%	100.0%	114	
	無職	1.981	732		28.8%	71.2%	100.0%	735	
学歴	中学	1.722	460	0.000	24.2%	75.8%	100.0%	455	0.002
	高校	1.956	1549		29.2%	70.8%	100.0%	1591	
	高専・短大	2.198	237		34.4%	65.6%	100.0%	224	
	大学・大学院	2.128	545		34.6%	65.4%	100.0%	541	
世帯収入	300万円未満	1.855	318	0.001	27.8%	72.2%	100.0%	349	0.007
	650万円未満	1.947	768		27.5%	72.5%	100.0%	800	
	950万円未満	2.059	354		31.7%	68.3%	100.0%	357	
	950万円以上	2.161	329		37.5%	62.5%	100.0%	315	
集団加入	なし	1.524	680	0.000					
	あり	2.116	2115						

る。また年齢については、若年層に比べ中高年層がボランティア活動に積極的であることが見てとれる。職業や学歴や収入といった社会階層に関わる変数に関しては、専門職、管理職、農業従事者の参加率が高いことや、学歴が高く世帯収入の多い人ほどボランティア活動に参加していることがわかる。いくつかの研究が指摘しているように、ボランティア活動に関しては、階層的に豊かな層ほど参加に積極的であるという高階層仮説が成立する可能性がある（平岡 1986；豊島 1998；仁平 2008）⁽³⁾。

続いて、集団加入について。2005 年の SSM 調査には、さまざまな集団への加入状況に関する設問がある。具体的には、「自治会・町内会」「婦人会、青年団、消防団、老人会、子ども会などの地域組織」「PTA」「商工会、商店組合、農協・漁協などの職業団体」「労働組合」「政党」「政治家の後援会」「地域生協」「市民運動団体や NGO」「ボランティア団体やグループ」「宗教団体」「趣味やスポーツの集まり」「その他の集団」に現在加入しているかがたずねられており、加入している集団が 1 つもない場合は「どれも加入していない」が選択されている。表 1 の最下行に示されたのは、何らかの集団に加入しているサンプルといずれの集団にも加入していないサンプルの参加スコアの平均である。ここから、集団に加入している人がボランティア活動への参加に積極的であることが見てとれる。

2-2. ボランティア活動への参加と社会的連帯

ところで、集団への加入状況に関する質問項目の中には、ボランティア団体や市民運動団体といった、ボランティア活動と概念的に関係の深いものが含まれている。そのため集団加入とボランティア活動の経験的な関連性について、次のような疑念が生じるかもしれない。集団加入がボランティア活動に影響しているのは、単にボランティア団体や市民運動団体に加入している人が積極的にボランティア活動をするからではないか、といった疑念である。もしそうであれば、それは一種のトートロジーであり、さきほどの分析結果もそれほど重要なものとはいえないだろう。しかし、集団加入とボランティア活動の関係をより詳細に検討した表 2 を見ると、上記の疑念が誤りであることがわかる。表には、ボランティア団体や市民運動団体といった集団だけでなく、どの集団であっても、そこに加入している人はそうでない人よりも参加スコアが高いことが示されている。集団の性質がどのようなものであれ、集団に加入することはボランティア活動への参加を高めるのである。

集団加入とボランティア活動の間にあるこうした関連はいったい何を意味しているのだろうか。このことを考える上で興味深い仮説が、投票やその他の政治活動への参加に関してなされた小林久高の研究において立てられている。それは、社会的連帯仮説と呼ばれる仮説である。小林（2000）によれば、職業に関わる集団であれ、趣味に関わる集

団であれ、地域団体であれ、そこに人が参加して人々と連帯をつくり上げることによって、さまざまな政治活動への参加は高まる。小林は、集団への加入は諸個人のもつ社会的連帯の一側面であり、社会的連帯こそが政治参加を高めると述べるのである⁽⁴⁾。

ここでこの社会的連帯仮説をボランティア活動に応用するならば、さまざまな集団への加入がボランティア活動への参加を高めるのは、集団加入によって人々との連帯が築かれるためであり、この社会的連帯こそがボランティア活動への参加を高めていると考えることができる。表2の分析結果は、ボランティア活動への参加についても社会的連帯仮説が成立することを示唆しているのである。

ボランティア活動への参加が社会的連帯によって支えられていることをより明確にするためには、社会的連帯に関わる集団加入以外の要因にも注目しておくのがいいだろう。2005年のSSM調査には、過去1年間に誰を自宅に招いたかということについて質問が用意されており、回答者には「親せきの人」「職場や仕事関係の人」「近所の人」「学校時代の友人」「同じサークルや団体に加入している人」「その他の友人や知人」「誰も招いたことがない」の中から当てはまるものすべてに○をするよう求められている。また調査には、ささいなことを含め、過去1年間に誰に悩み事を相談したかということについても同様の質問がある。回答者は、上記の選択肢に「家族」を加えたものの中から当てはまるものすべてに○をするよう求められており、相談をしたことがなければ「誰にも相談したことがない」が選択されている。これら2つの問いに対して、「誰も招いたことがない」「誰にも相談したことがない」以外につけられた○の数は、諸個人の社会関係がどの程度の広がりをもつかを表す指標となるだろう。

そこで、以下の方法で社会関係の広がりに関する尺度を作成することにしよう。まず、自宅への訪問に関して「誰も招いたことがない」以外につけられた○の数を社会関

表2 集団加入とボランティア活動への参加

集団への加入状況		参加スコア (平均)	N	有意 確率	集団への加入状況		参加スコア (平均)	N	有意 確率
ボランティアの団体 やグループ	加入	4.021	187	0.000	趣味やスポーツの集 まり	加入	2.441	732	0.000
	非加入	1.825	2608			非加入	1.806	2063	
市民運動団体や NGO	加入	3.400	55	0.000	商工会、商店組合、 農協・漁協などの職 業団体(有職者のみ)	加入	2.310	284	0.000
	非加入	1.943	2740			非加入	1.909	1720	
自治会・町内会	加入	2.091	1546	0.000	労働組合(常時雇用され ている一般従業者のみ)	加入	1.932	222	0.423
	非加入	1.825	1249			非加入	1.873	772	
婦人会、青年団、消防 団、老人会、子ども 会などの地域組織	加入	2.439	481	0.000	政党	加入	2.778	45	0.000
	非加入	1.875	2314			非加入	1.959	2750	
地域生協	加入	2.349	255	0.000	政治家の後援会	加入	2.922	116	0.000
	非加入	1.934	2540			非加入	1.931	2679	
PTA (30代、40代のみ)	加入	2.174	317	0.000	宗教団体	加入	2.575	134	0.000
	非加入	1.795	752			非加入	1.942	2661	

表3 社会関係の広がりボランティア活動への参加

		参加スコア			近年のボランティア活動経験				
		平均	N	有意確率	あり	なし	合計	N	有意確率
社会関係	広	2.276	925		41.4%	58.6%	100.0%	945	
	中	1.967	968		28.7%	71.3%	100.0%	904	
	狭	1.666	902	0.000	19.5%	80.5%	100.0%	967	0.000

係の広がりに関する1つの変数とし、悩み事に関して「誰にも相談したことがない」以外につけられた○の数をもう1つの変数とする。次に、これら2つの変数による主成分分析を行い、得られた第1主成分得点を「社会関係スコア」とする⁽⁵⁾。

表3は、以上のように作成された社会関係スコアをもとにサンプルを3分し、社会関係の広がりボランティア活動との関係を見たものである。ここから、社会関係の広がりには明らかにボランティア活動への参加を高めていることがわかる。集団加入とは異なる社会関係の広がりという変数を用いた分析からも、人々との間に築かれた社会的連帯がボランティア活動への参加に影響していることがいえるのである。

2-3. ボランティア活動への参加と過去の社会的連帯

社会的連帯に関わる要因とボランティア活動の関連を指摘した研究は本稿の他にもある。例えば、福祉ボランティアに関する稲月正の研究では、加入する集団数が増えるほど福祉ボランティア活動への意欲、実際の参加率、継続性が高まることが明らかにされている（稲月1994）。また、環境ボランティアに関する野田浩資らの研究では、近隣交際の頻度と集団所属から尺度化されたネットワーク因子が、活動への参加と正の相関関係にあることが示されている（野田ほか2000）。こうした研究や本稿のこれまでの分析では、社会的連帯に関わる要因として、集団加入や近隣交際の頻度、社会関係の広がりといったものが扱われている。これらはいずれも、「現在どれほどの連帯を人々との間に築いているか」ということに関わる変数である。

ところで、2005年のSSM調査には、これまで本稿や既存研究で扱われてきたものとは異なる、社会的連帯に関する興味深い変数が存在する。それは、青年期の友人関係に関する変数である。そこで次に、この青年期の友人関係とボランティア活動との関係について見ていくことにしよう。

調査では、高校時代（高校に通っていない場合は中学時代）に学校内および学外に仲のよい友達がどの程度いたかがたずねられており、それぞれ「多くいた」「少しいた」「あまりいなかった」「まったくいなかった」の4つから回答が求められている。それぞれの項目に対して、回答が「多くいた」に近いほど得点が高くなるよう4～1点を与え、2つの得点の第1主成分得点を「青年期の友人関係スコア」としよう⁽⁶⁾。表4は、この友人関係スコアをもとにサンプルを2分し、青年期における友人関係の広がり近年の

表 4 青年期における友人関係の広がりボランティア活動への参加

年齢	青年期の友人関係	近年のボランティア活動経験				有意確率
		あり	なし	合計	N	
全体	広	35.9%	64.1%	100.0%	1184	0.000
	狭	25.3%	74.7%	100.0%	1602	
20 代	広	29.9%	70.1%	100.0%	137	0.046
	狭	20.0%	80.0%	100.0%	165	
30 代	広	25.1%	74.9%	100.0%	231	0.010
	狭	16.0%	84.0%	100.0%	288	
40 代	広	38.9%	61.1%	100.0%	244	0.005
	狭	27.4%	72.6%	100.0%	285	
50 代	広	36.9%	63.1%	100.0%	282	0.005
	狭	27.0%	73.0%	100.0%	426	
60 歳以上	広	43.8%	56.2%	100.0%	290	0.000
	狭	30.4%	69.6%	100.0%	438	

ボランティア活動経験の関係を明らかにしたものである。

表から、全体では、青年期に広い友人関係をもっていた人はそうでない人よりもボランティア活動に参加していることがわかる。人々との間に築かれた連帯は、たとえそれが過去のものであっても、ボランティア活動への参加を高めているのである。興味深いことに、こうした関連はすべての年齢層で成立する。20 代の若年層から 60 歳以上の高年層までのいかなる年齢層においても、青年期に広い友人関係を築いていた人ほどボランティア活動をしているのである。

さて、これまであつかわれた変数がボランティア活動に与える影響についてより詳細に検討するために、近年のボランティア活動経験（なし＝0，あり＝1）を従属変数としたロジスティック回帰分析を行うことにしよう。分析は、属性に関わる基礎変数を独立変数としたモデル 1 と、社会的連帯に関わる 2 つの変数（現在の社会関係スコア・青年期の友人関係スコア）を加えたモデル 2 から構成される⁽⁷⁾。表 5 に示されたのがその結果である。

モデル 1 からは、年齢、専門職ダミー、管理職ダミー、教育年数がボランティア活動に対して正の効果をもつことが見てとれる。モデル 2 からは、年齢と専門職ダミーに加え、現在の社会関係スコアと青年期の友人関係スコアがともに正の効果をもつことがわかる。人々との間に現在築かれている社会的連帯は、やはりボランティア活動への参加に影響している。また、これまでの研究では指摘されてこなかったが、過去に築かれた社会的連帯もボランティア活動への参加を促している。

では、現在や過去の社会的連帯はなぜボランティア活動への参加を促すのだろうか。連帯に関わる要因と参加との間に「関連性がある」ことを指摘する研究においても、「そうした関連がなぜ存在するのか」ということについては分析から明らかにされないことが多い。われわれは次にこの問題へと進んでいかなければならない。

表 5 近年のボランティア活動経験についてのロジスティック回帰分析

	モデル 1		モデル 2	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
性別（基準：女性）	.007	1.007	.219	1.245
年齢	.023	1.023**	.031	1.032**
職業（基準：ブルー）				
専門	.444	1.559*	.570	1.769**
管理	.544	1.723*	.401	1.493
ホワイト	.150	1.162	.103	1.109
農業	.123	1.131	.168	1.183
無職	.058	1.060	.056	1.058
教育年数	.056	1.057*	.055	1.056
世帯収入	.021	1.022	.009	1.009
社会関係スコア（現在）			.524	1.688**
友人関係スコア（青年期）			.203	1.225**
（定数）	-2.968	.051**	-3.491	.030**
N	1810		1793	
-2 LL	2166.995		2035.627	
NagelkerkeR ²	.036		.119	
χ^2 値	46.026**		156.793**	

** : p<0.01, * : p<0.05

3. 社会的連帯を通じた社会化と公共的活動への自発的参加

3-1. 公共的活動への自発的参加を生み出す精神的基盤

前述したように、ボランティア活動は自発性に基づく公共的活動である。そこで、上記の問題を明らかにするためにまず、公共的活動への自発的な参加はどのような精神的基盤の上に成り立つのかという問題について検討しておくことにしよう。社会的連帯がボランティア活動への参加を促すのは、連帯がそうした精神的基盤に関係しているためだと思われるからである。

公共的活動は集団や社会をよりよいものとするための活動なので、人が集団や社会というものを志向しなければ、そもそも活動への参加は生まれない。とはいえ、集団や社会を志向する意識のすべてが公共的活動への自発的参加をもたらすわけでもない。集団や社会に向けられる意識の中には、集団や社会に課される規律に従おうとする意識も含まれるが、こうした意識からもたらされる参加は、自発的なものというより義務としての性格が強いものとなる。

集団や社会に向けられる意識のうちで、人々の自発的な意志と結びつく要素は何かという問題と関連して、デュルケムは、規律の精神と社会集団への愛着について次のことを述べている。すなわち、規律の精神は権威をもって命令を下すものとしての社会に向けられる感情であるのに対して、社会集団への愛着は、望ましく良きものとしての、実現すべき理想としての、われわれの意志が愛情と感謝をこめて進んで身を委ねる対象と

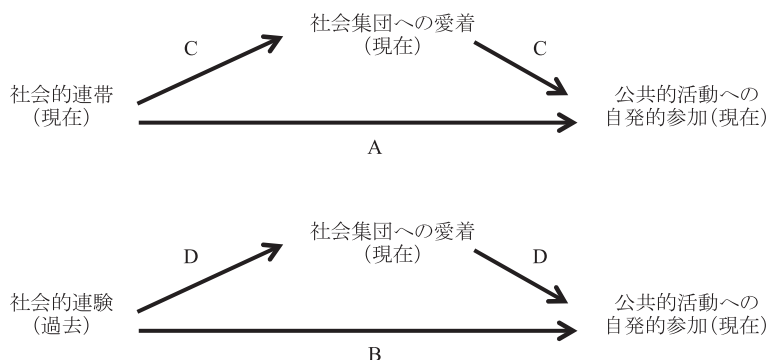


図2 社会的連帯・社会集団への愛着・公共的活動の関係

しての社会に向けられる感情であると (Durkheim 1925=2010: 173)。社会集団への愛着が人々の自発的な意志を惹起することを示唆するこうしたデュルケムの議論は、公共的活動への参加という文脈においても重要だと思われる。公共的活動への自発的な参加は、社会集団に対してわれわれが感じる愛着によって支えられていると考えられるからである。

社会的連帯がボランティア活動への参加を促すのも、この社会集団への愛着という要因に関係しているのではないだろうか。集団や社会に愛着を感じられなければ、人は自発的にそれらをよりよいものにしようとはしない。そして、社会に生きるさまざまな人々との連帯なしに、集団や社会に愛着を感じることは難しい。現在や過去の社会的連帯がボランティア活動への参加を促すのは、それらが社会集団への愛着をもたらし、社会集団への愛着が公共的活動への自発的な参加をもたらすからだと考えられるのである (図2)。

3-2. 社会的連帯・社会集団への愛着・公共的活動への参加

上記の仮説を念頭に、再びデータに向かおう。この仮説をデータから検証するためには、(1) 現在の社会的連帯に関する変数、(2) 過去の社会的連帯に関する変数、(3) 社会集団への愛着に関する変数、(4) 公共的活動への参加に関する変数の4つが必要となる。ただ、これらの情報を1つのデータで網羅したものを見つけるのは現在のところ難しい。そこで以下では、いくつかのデータと、データに基づいてなされた既存の研究をもとに検討を進めていきたい。

まず、現在の社会的連帯、社会集団への愛着、公共的活動の関係 (図2 矢印 C) について。

表6は、2008年のJGSSデータをもとに、現在加入している集団数といくつかの社会集団への愛着の関係を見たものである⁽⁸⁾。ここから、現在加入している集団の数が多いほど、居住地域への愛着、日本への愛着、東アジアへの愛着が高まることがわかる。

表 6 集団加入と社会集団への愛着

		居住地域への愛着			日本への愛着			東アジアへの愛着		
		平均	N	有意確率	平均	N	有意確率	平均	N	有意確率
集団への加入	3つ以上	3.312	154		3.605	152		2.395	152	
	2つ	3.180	261		3.563	261		2.172	261	
	1つ	3.164	592		3.500	590		2.129	583	
	なし	3.122	1084	0.006	3.427	1076	0.000	2.034	1059	0.000

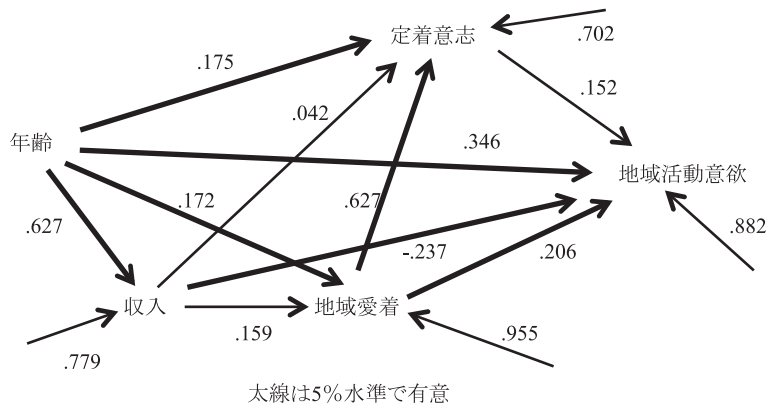


図 3 地域への愛着と地域活動への参加 (小林・堀川 1996)

社会的連帯に関わる集団加入数は、たしかにさまざまな社会集団への愛着を高めている。

図 3 は、地域活動（地域生活に関する問題解決をめざす運動）への参加意欲についておこなわれたパス解析の結果である（小林・堀川 1996）。ここから、地域社会への愛着は地域活動への参加意欲を高める効果をもつことが読みとれる。活動への意欲が自発的な参加を促す重要な要因であると考えれば、社会集団に対する愛着は公共的活動への自発的な参加を支えているといっていいただろう。

以上の 2 つを合わせて考えると、先に述べた仮説が経験的にも的外れなものではないことがわかる。現在豊かな連帯のもとにあるほど社会集団への愛着は強くなり、社会集団への愛着が強いほど人は自発的に公共的活動に参加するようになる。このことから、社会的連帯が公共的活動への参加に影響するのは、連帯によって社会集団への愛着が高まるためだと考えられるのである。

3-3. 過去の社会的連帯・社会集団への愛着・公共的活動への参加

過去に築かれた社会的連帯、社会集団への愛着、公共的活動の関係（図 2 矢印 D）についてもデータから明らかにしておこう。表 7 は、大学生を対象とした調査データを用い、青少年期の友人関係とさまざまな社会集団に対する現在の愛着の相関を示したものである⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。表からは、幼少期に友人と集団で遊んだ経験や、青年期の友人関係の

表7 友人関係（青少年期）と社会集団への愛着（現在）の相関

	家族への愛着	地域への愛着	日本への愛着	人類への愛着
子どもの頃、友達と集団でよく遊んだ	0.138*	0.213**	0.320**	0.118 ⁺
高校生の頃、友人は多い方だった	0.290**	0.341**	0.172**	0.173**
高校生の頃、親友と呼べる友人がいた	0.262**	0.127*	0.164**	0.085

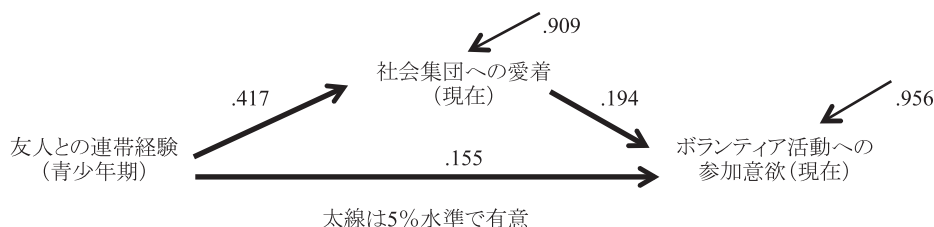
N = 270, **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$, +: $p < 0.10$ 

図4 ボランティア活動への参加意欲についてのパス解析

豊富さが、現在におけるさまざまな社会集団への愛着と正の相関関係にあることがわかる。過去における友人との連帯経験は、現在における社会集団への愛着を高めている。

過去の連帯経験が社会集団への愛着を介して公共的活動へと結びついているかを検討するために、ここでいくつかの変数を作成しておくことにしよう。まず、表7にある友人関係についての3項目による主成分分析をおこない、そこで得られた第1主成分得点を「青少年期の友人との連帯経験」とする。社会集団への愛着については、家族への愛着、居住地域への愛着、日本への愛着、人類への愛着の4項目による主成分分析を行い、第1主成分得点を「社会集団への愛着」とする。参加については、「地域の清掃活動」「災害被災地の復興活動」「老人ホームでの手伝い」「障害者施設での手伝い」「ホームレスへの炊き出し活動」への参加意欲をたずねた項目を使用する。それぞれの項目に対して、「参加したい」に5点、「やや参加したい」に4点、「どちらでもない」に3点、「あまり参加したくない」に2点、「参加したくない」に1点を与え、5項目の第1主成分得点を「ボランティア活動への参加意欲」として使用する⁽¹¹⁾。

以上の変数を用い、ボランティア活動への参加意欲についておこなったパス解析の結果を示したものが図4である。ここから、青少年期の友人との連帯経験が現在における社会集団への愛着を介してボランティア活動への参加意欲を高めていることがわかる。豊かな連帯の中で育つことにより、人はさまざまな社会集団に対して愛着を感じるようになる。そしてそのことが、現在におけるボランティア活動への参加意欲に結びついているのである。

3-4. 参加と社会化の循環構造

これまでの分析から、豊かな連帯の中で育ったり現在そうした連帯をもつ者が、社会

に対する愛着をもつこととなり、そのことが公共的活動への自発的参加に結びつくことが示された。これらの知見のうち、特に過去の連帯の影響について分析から示されたことは、ボランティア活動などの自発性に基づく公共的活動を社会化という観点からとらえる必要があることを示している。周知の通り社会化とは、個人が社会性を獲得していく過程のことである。ここでいう社会性には人が社会生活を送る上で必要とされるあらゆる要素が含まれるが、社会に対する愛着や、社会をよりよくしたいという意志がその重要な要素であることは言うまでもない。「豊かな連帯の中で育つことで、人は社会に対して愛着をもつこととなり、そのことが将来におけるボランティア活動への参加を促す」という本稿で提示された知見が意味するのは、ボランティア活動への参加が連帯経験を通じた社会化によってもたらされているということに他ならない。

ところで、ボランティア活動についてはよく次のようなことを耳にする。ボランティア活動に参加することで、人は社会に生きる様々な人々とつながりをもち、彼らに対する共感や愛着を育むことができる、といったことである。本稿で示されたのが「社会化によってもたらされる参加」であるとすれば、こうした言及は、いわば「参加によってもたらされる社会化」に関するものといえるだろう。これまでの日本の研究においては、「社会化によってもたらされる参加」のメカニズムについてほとんど検証されてこなかった。それに対して、「参加によってもたらされる社会化」に関しては、明示的に社会化という言葉が使われるかどうかは別として、しばしば指摘がなされる。

ボランティア活動への参加が、多様な人々に対する愛着の形成や新たな連帯の構築を可能としているということ。その意味で、ボランティア活動への参加は社会化に寄与しているということ。これらのこと自体については、筆者もおおむね同感である。ただこのことから、「だから参加することは大切なのだ」といった結論ばかりを求めてしまえば、われわれは問題の根本を見落としかねない。ボランティア活動は、参加する人に愛着や連帯の形成をもたらすかもしれないが、そうした参加を背後で支えているものもまた、社会に対する愛着であり、それを育む連帯だからである。

これらのことを念頭に置くとき、われわれは、ボランティア活動と社会化との間に次のような循環構造が成立していることに気がつく。すなわち、豊かな連帯の経験やそこで育まれる社会に対する愛着が、社会をよりよくするための活動を生み、活動への参加は新たな連帯や愛着の形成を可能にする、といった循環構造である。ボランティア活動などの公共的な活動について議論する際には、参加することの大切さを説くだけでなく、参加と社会化のこうした循環構造を全体として見渡す必要がある。われわれはその上で、どうすれば循環の外側にいる者たちを輪の中に招き入れることができるかということについて、深いレベルの知見を蓄積していく必要があるだろう。

4. おわりに

本稿では、ボランティア活動を自発性に基づく公共的活動として位置づけ、現在および過去の社会的連帯に焦点を置いた分析を進めてきた。そこで出された結論は、豊かな連帯が社会への愛着を生み、社会への愛着が社会をよりよいものとするための活動を生む、といったものである。ここでこの「豊かな連帯」というものをやや違った角度から眺めるならば、それは「人々や社会から愛されること」とでも言い換えられるかもしれない。その場合、本稿の結論は次のようなものとなる。人々や社会から愛された者が社会を愛すこととなり、社会を愛する者の手によって社会をよりよいものとするための活動が生まれる。筆者はここで、『レ・ミゼラブル』に登場するジャン・ヴァルジャンの姿を思い浮かべてしまう。

強盗の罪で捕まったジャン・ヴァルジャンは、4度の脱獄未遂の罪も加わり、19年の歳月を監獄で過ごした。釈放後、旅をするジャン・ヴァルジャンに対して、町の人たちの反応は冷たく、厳しかった。彼が、元囚人であることを示す黄色い旅券を持っていたからである。一夜を過ごすための寝床の提供を断る住民たちを前に、ジャン・ヴァルジャンの心は荒んでいた。彼は孤独だった。

こうしたジャン・ヴァルジャンが、後の人生で貧しい人たちや社会のために尽力する姿は、われわれに深い感動を与える。そしてわれわれは、ジャン・ヴァルジャンの人生に大きな転機をもたらしたのが一人の町の司教であることを知っている。ジャン・ヴァルジャンが寝床を求めて乱暴にドアをノックしたとき、司教は「お入り」と言い、彼に温かい食べ物と寝床を用意する。司教はジャン・ヴァルジャンを、彼がこれまで呼ばれていたように「お前」とは呼ばず、「あなた」と呼び、「私の兄弟」と呼ぶ。ジャン・ヴァルジャンが司教の家にあった銀の食器を盗んで逃走し、憲兵の手で司教の家に連れ戻されたとき、司教は、食器は彼にあげたのだと言って彼を放免にする。「わたしの兄弟のジャン・ヴァルジャンよ、あなたはもう悪の味方ではなく、善の味方です」(Hugo 1862 = 1996: 168)。

人々や社会から愛された者が社会を愛すこととなり、社会を愛した者の手によって社会をよりよいものとするための活動が生まれる。われわれはジャン・ヴァルジャンの人生に起きた転機を1つの現実として認識する必要があるのかもしれない。循環構造の外側にいる者たちをどうしたら輪の中に招くことができるかという問題に対する答えも、きっとこのあたりに隠されているように思う。

注

- (1) 活動の継続性について、ここで簡単に触れておきたい。鈴木広は、電車で席をゆずるなどのアドホックな援助行動とボランティア活動とを区別するために、ボランティア活動（鈴木言葉ではボランティア的行為）の要件に継続性を含めている（鈴木 1987）。しかし、特定のお年寄りに継続的に席をゆずり続けたからといって、それをボランティア活動と呼べるかは疑問である。筆者は、アドホックな援助行動とボランティア活動を分ける上で重要なのは、活動が継続されるかどうかではなく、活動目標が特定の個人の状態を改善することにあるか集団や社会の状態を改善することにあるかの違いだと考えている。ここで継続性よりも公共性を重視するのはそうしたことを考慮したためである。
- (2) 職業は SSM 職業大分類をもとに、専門を「専門」、管理を「管理」、事務・販売を「ホワイト」、熟練・半熟練・非熟練を「ブルー」、農業を「農業」として再構成している。
- (3) ただ、ボランティア的な活動と社会階層の関係については、高階層と低階層の両極で参加が高まることを示す研究（鈴木 1987；稲月 1994）もあり、諸研究において一貫した結論が得られているわけではない。
- (4) 社会的連帯が政治参加を高めていることのさらなる根拠として、小林は、広い友人関係をもっていたり、誰かと同居していたりすることによっても政治参加が高まることを明らかにしている（小林 2000, 2002）。
- (5) 社会関係の広がりについては、留置 A 票・B 票の両方において同じ形式でたずねられている。A 票から作成された社会関係スコアの寄与率は 66.9%。B 票から作成された社会関係スコアの寄与率は 66.5% である。
- (6) 寄与率は 68.6%。
- (7) 世帯収入については、「なし」「25 万円未満」「25～50 万円」…「400～450 万円」…「1950～2050 万円」「2050 万円以上」といった形の回答カテゴリーが用意されている。分析には、カテゴリーの中央値を 100 万円単位に換算した得点を使用している。例えば、「400～450 万円」の場合、この得点は 4.25 となる。なお、回答が「2050 万円以上」であった場合は 20.5 を与えている。教育年数は、中学=9、高校=12、高専・短大=14、大学=16、大学院=18 として数値化している。
- (8) 集団への加入状況に関して、調査では、「政治関係の団体や会」「業界団体・同業者団体」「ボランティアのグループ」「市民運動・消費者運動のグループ」「宗教の団体や会」「スポーツ関係のグループやクラブ」「趣味の会」「消費者生活協同組合（生協）」にそれぞれ加入しているかどうかをたずねられている。集団加入数は、これらの集団のうちいくつの集団に加入しているかを表す変数である。社会集団への愛着については、それぞれ「かなり愛着がある」「ある程度愛着がある」「あまり愛着がない」「まったく愛着がない」の 4 つから回答が求められている。分析には、愛着が強いほど得点が高くなるよう 4～1 点を与えたものを使用している。
- (9) 調査対象は同志社大学の 1～4 年生。調査時期は 2011 年 10 月。調査方法は講義を利用した質問紙法の集合調査。調査対象者は 471 人、有効回答数は 273（回収率 58%）である。
- (10) 友人関係については、「当てはまる」に 5 点、「やや当てはまる」に 4 点、「どちらでもない」に 3 点、「あまり当てはまらない」に 2 点、「当てはまらない」に 1 点を与えたものを使用している。また、愛着については、「すごく愛着がある」に 6 点、「かなり愛着がある」に 5 点、「やや愛着がある」に 4 点、「あまり愛着がない」に 3 点、「ほとんど愛着がない」に 2 点、「まったく愛着がない」に 1 点を与えたものを使用している。
- (11) 友人との連帯経験、社会集団への愛着、ボランティア活動への参加意欲の寄与率は、それぞれ 54.7%、41.6%、64.8%。

文献

- Durkheim, É., 1925, *L'Éducation Morale*. (=2010, 麻生誠・山村健訳『道徳教育論』講談社.)
- 早瀬昇, 2004, 「ボランティア」社会福祉法人大阪ボランティア協会編『ボランティア・NPO 用語事典』中央法規, 2-4.
- 平岡公一, 1986, 「ボランティアの活動状況と意識構造——都内 3 地区での調査結果からの検討」『明治学

院論叢 社会学・社会福祉学研究』394・395：29-61.

Hugo, V., 1862, *Les Misérables*. (= 1996, 佐藤朔訳『レ・ミゼラブル (1)』新潮社.)

稲月正, 1994, 「ボランティア構造化の要因分析」『季刊社会保障研究』29(4)：334-347.

入江幸男, 1999, 「ボランティアの思想——市民的公共性の担い手としてのボランティア」内海成治・入江

幸男・水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』4-21.

片桐新自, 1995, 『社会運動の中範囲理論——資源動員論からの展開』東京大学出版会.

小林久高・堀川尚子, 1996, 「流動層のコミュニティ意識」『ソシオロジ』41(2)：55-73.

小林久高, 2000, 「政治意識と政治参加の動態」間場寿一編『講座社会学 9 政治』43-88.

———, 2002, 「政治参加と社会的連帯」『社会システム論集』7：33-44.

———, 2012, 「公共性の精神的基盤」『社会分析』39：7-24.

中野民夫, 2012, 「ボランティア」大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂：1188.

仁平典宏, 2008, 「『参加型市民社会』の階層的・政治的布置——『階層化』と『保守化』の交点で」土場
学編『2005年SSM調査シリーズ7 公共性と格差』2005年SSM調査研究会, 189-210.

野田浩資・亀田紘一・山添史郎, 2000, 「環境ボランティア参加の規定要因と地域社会——滋賀県守山市の
赤野井流域協議会を事例として」『福祉社会研究』1：12-24.

鈴木広, 1987, 「ヴォランティア的行為における“K”パターンについて——福祉社会学的例解の素描」
『哲学年報』46：13-32.

豊島慎一郎, 1998, 「社会参加にみる階層分化——社会階層と社会的活動」片瀬一男編『1995年SSM調査
シリーズ7 政治意識の現在』1995年SSM調査研究会, 151-178.

付記

2次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータ
アーカイブから「2005年SSM日本調査(2005SSM研究会データ管理委員会)」「日本版General Social
Surveys(JGSS-2008)(大阪商業大学JGSS研究センター)」の個票データの提供を受けました。関係者の
みなさまに深く感謝申し上げます。

What Encourages the Participation in Volunteering

Takeshi Saruwatari

The purpose of this article is to consider volunteering from sociological perspective. First, the concept of volunteering is discussed. By focusing on two crucial characteristics of volunteering—spontaneity and publicity—the conceptual relationships between altruistic activity, public activity, and volunteering are clarified. Second, through an analysis of survey data, I examine factors encouraging participation in volunteering. Analysis shows that the level of solidarity—both present and the one acquired in past—has significant effect on the current participation in volunteer activities. Finally, the mechanism linking solidarity and volunteering is considered by focusing on attachment to social groups and socialization.

Key words : Volunteering, Solidarity, Attachment to social groups, Socialization